

今日は『西郷どんと聖書』というテーマで考えたいと思います。

西郷隆盛（さいごう たかもり/1828-1877/文政10-明治10）と言えば、どんな事を思い浮かべますか？

私は何と言っても武蔵丸（むさしまる）ですね。元横綱の武蔵丸。太い眉毛、でっかいギョロ目、分厚い唇、XLサイズの巨体。恐らく、ミクロネシア系のようなDNAが入っていたのではないかと思ったりします。そのイメージがどこから来たかという、上野にある西郷隆盛の銅像がそんな姿です。

でも、西郷さんの本当の姿を正確に知る事はできません。写真が1枚も残ってないから。彼は写真に撮られる事が大嫌い。明治天皇が「朕（ちん）のために1枚だけ写してほしい。私だけに渡してほしい」と言った時でも断りました。なぜ、そんなに写真が嫌いなのか？

西郷さんは若い頃、島津斉彬（しまづ なりあきら/1809-1858/文化6-安政5）という名君に、御庭番（おにわばん）・今の職員として仕えていました。島津斉彬は幕末に登場した名君で、先進的というか開明的というか、非常に英邁（えいまい）な君主です。日本の国旗が日章旗なのも、元を辿って行ったら斉彬ですよ。彼が愛用していたトランクは、何とルイ・ヴィトン。「これは素晴らしい」と思ったら、良い物は外国の物でもどんどん取り入れました。

また、ペリー（1794-1858）の黒船がやって来るよりもはるか前に、その事を事前にチェックし、今どこの国の何という港にいるのかという事も知っていたのです。黒船が来たら、日本は外圧をかけられる。その時に押し返していくためには、力を蓄えておかなければならない。それで薩摩に溶鉱炉を造り、造船所を建て、洋式軍艦を造り、その内の1隻を徳川幕府にプレゼント。そうやってパイプを繋ぎながら、次の日本をどうやっていくかを考えていた人物です。

彼はまた、大名の中で1番最初に写真を撮られた人。その頃の日本人は「写真1枚撮られる毎に、魂のエネルギーが吸い取られる」という迷信めいた事を信じていました。

撮られただけではなくて、撮られまくった人。そして、撮りまくった人。斉彬は「さあ、これから!」という時に突然死したでしょ。暗殺説もあります。西郷さんは「写真の撮られ過ぎだ!」と思った。

だから明治天皇がおっしゃっても、「いや、それだけは勘弁して下さい。」

それで、今残っている西郷さんの肖像画は、従弟の大山巖（おおやま いわお）と弟の西郷従道（さいごう つぐみち）を、足して2で割ったモンタージュ。本当の西郷さんの姿ではないと言われています。

西郷さんは、本当の外面が分からないだけでなく、内面も非常に難解な人物、分かりにくい人物です。

それで今日は、NHKの大河ドラマ『西郷（せご）どん』を100回見ても出て来ない話をします。

何かというと、実は西郷さんは非常に深く聖書を読み、それだけではなく、他の人に教え、それだけではなく、彼自身がクリスチャンになり、洗礼を受けたという証言がある。「ほんまかい!？」そこを皆さんと一緒に検証していきたいと思います。

ところで、斉彬が亡くなった後で、島津家と西郷隆盛との関係は非常に悪化しました。西郷は睨まれて2度にわたって島流し。2度目は沖永良部島に島流しされ、箱詰めになされて、寄生虫の病気・フィラリアに罹ってしまった。西郷さんの股間、もちろん男性ですから袋があるわけ。陰囊。玉の入っている袋。彼の陰囊は、赤ちゃんの頭よりも大きかった。これは病気です。

晩年になるにつれて、その病気が辛くて、痛くてたまらない。その病苦と闘いながら、あの偉業を成し遂げたのが西郷隆盛という人。

一生出て来れないはずが、どうしても彼が必要だという事で、島流しを解除するために走り回ったのが親友の大久保利通（おおくぼ としみち/1830-1878/文政 13-明治 11）。

そして彼の読み通り、この島流しから出て、たった 5 年で明治維新を成し遂げたのが西郷隆盛。

もちろん明治維新という革命は、西郷隆盛一人でやったものではありません。色んな人たちが各々役割分担したのですが、それでも総仕上げの部分は、西郷がいなければ、まず不可能だったと思います。

明治維新は 2 つのものをぶっ潰しました。1 つは 260 年続いた徳川幕府（1603-1868/慶長 8-慶応 4）。

これだけでもすごい事です。260 年間、盤石の支配体制だった徳川幕府をぶっ潰す事ができたのは西郷の荒業です。

しかし、それよりもっとすごい事をやった。700 年以上続いている武家社会を木っ端微塵に粉碎したのです。徳川時代には 260 の藩があり、そのトップに藩主がいました。お殿様。お殿様には家来たちがいて、領地があって、領民がいて、そこで採れる米が年貢で、それを経済資本にしているのが諸藩の体制です。

明治維新になって、西郷中心に行ったのは廃藩置県。これは、お殿様が持っている領地と領民を全部取り上げるという革命、つまり殿様と武士のリストラ。これが明治維新です。これは、普通の侍には絶対できません。なぜなら、主君に対して忠誠を尽くす武士道というモラルに生きるのが侍だからです。

西郷がやったのは、主君の持ち物を全部取り上げる事。だから武士道に忠実な人は、普通できません。

明治維新を成し遂げるのに一番貢献した藩は薩摩藩でした。つまり明治維新の結果、一番恩恵をもらって当たり前の藩が薩摩藩なのに、その薩摩藩藩主の領地領民を全部取り上げるという事を西郷がやったので、他の藩は従わざるを得なくなったんです。西郷隆盛は非常に恨まれましたが、これが必要だという事でやっていきました。

さて、明治維新が成功した後で、政府の要人たちはハタと困った事に気がつきます。今までの古い幕藩体制という建物を、ガラガラポンで更地にした。だけどその後、次にどんな建物を建てたらいいかという設計図を…持ってなかった。潰すだけだったら誰でもできる。誰でもというワケではないけど、でも潰した後、新しい日本をどのようにしていくのか、という青写真を彼らは持ってなかった！

そこでいっそのこと、先進国に見学に行き、「国造りはどうやったらいいのかを学んで来よう」という事で、明治維新の要人たち、岩倉使節団が明治 4 年（1871）に出発します。政府の要職の人たちが、日本を 2 年間も留守にして海外に見学に行くのです。

明治維新には、維新三傑と言われる英雄がいました。西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允（きど たかよし/1833-1877/天保 4-明治 10）。この内、大久保と木戸が行き、伊藤博文（いとう ひろぶみ/1841-1909/天保 12-明治 42）もついて行った。団長は岩倉具視（いわくら とみ/1825-1883/文政 8-明治 16）。全員で 107 人。

かかった費用は国家予算の 1.5%。今で言うと 1 兆 5 千億円。日本の代表という事で、アパホテルみたいな所には泊まれない。5 つ星最高級のスイートを貸し切らないと日本が舐められるというので、これで随分お金を使った。

出来立てホヤホヤの明治政府。政府の要人が皆いなくなってスッカランになったら、揺り戻しが来る

かもしれない。しかし、この人が残っていたら重しになる。彼がいてくれたら睨みが利いて、明治政府を転覆しようなどと言う者は出ないだろう。そう思われた人物こそが西郷隆盛。彼は、とにかく存在感があったと言われていました。

ところで、岩倉や大久保が2年間行く時に、西郷に一つ釘を刺しました。「我々が日本を留守にしている間に、国の形を変えるような、大きな変更や決定は何もしないで下さい。帰って来たら話し合っ決めてみましょう。とにかく大人しくして下さい。みんなが暴れないように睨みを利かしていてくれたら、それでいいですから」。西郷は聞く人ではありません。1年10か月の留守の間に、10個の改革をやりました。

最初にやったのは**恩赦・特赦の乱発**。徳川慶喜（とくがわ よしのぶ/1837-1913/天保8-大正2）をはじめ、幕府方に付いた大名の殿様は全て無罪放免。幕府の軍人として官軍に攻撃を加えた人たちも、全て無罪放免にするだけではなくて、明治政府の要職に次々に抜擢しました。これは、世界の革命史では普通あり得ません。フランス革命でもロシア革命でも、革命軍によって滅ぼされた方は息の根を止められました。ところが西郷は、「明治維新が終わったら、みんな日本国民じゃないか」と、次々に恩赦・特赦で明治政府の一員に・重責のあるポストに抜擢していくのです。帰ってきた帰国組が、それを知ってメチャクチャ怒りました。

ついでに言うと、徳川慶喜は大正時代まで生きました（大正2年没）。彼は趣味が写真。だからやっぱり魂は吸われぬ。

2番目、**徴兵制**。西郷隆盛は好戦的!? 違います。これは、「市民平等社会を作るためにやらなきゃならない」と考えてやった事。江戸時代には身分制度がありましたね。士農工商。日本版のカースト制度と言っていいかも知れません。一番上が侍。なぜ侍が偉いのか。兵士だからです。「いざという時には命を捨てて戦う。だから、平時に於いては彼らに特権を与えるべきだ。侍は兵士なので一番偉い」というのが士農工商の論理です。

ところが徴兵制を導入し、国民皆兵制にして、全ての日本国民男子は兵士になるという環境を整えたら、士族だけが特別という根拠を奪う事ができる。これで、「日本人は皆同じ」と言える基礎を築く事ができるのです。

3番目、今日は特にこれに注目したいのですが、**キリスト教禁令の撤廃**。江戸時代はキリシタン邪宗門（じゃしゅうもん）と言って、「キリシタンは見つけ次第、縛り上げて、拷問して、殺してしまえ!」始めたのは、2代目将軍 徳川秀忠（とくがわ ひでただ/1579-1632/天正7-寛永9）。この秀忠から250年間にわたって、「キリシタンはまかりならん。見つけたら奉行所に密告しなさい。そうしたらご褒美が貰える」という立看板が全国に乱立していました。この看板を高札（こうさつ）と言います。

明治政府は、この江戸時代のキリシタン禁制をそのまま受け継ぎました。そして、明治元年（1867）に1つの事件が起きます。長崎は外国人が住んでもオーケー。その長崎の町に、カトリックの神父が綺麗な教会堂を建てました。これは日本人のためではなく、長崎に住んでいる外国人のための教会堂です。

ところがある時、村人が数人やって来て、神父に「私たちはキリシタンです。250年間、信仰を密かに守ってきました。どうぞ教会に入れて下さい!」彼らは入って感激しました。この人たちは浦上（うらかみ）村から来た人たちで、浦上村の人口の95%はキリシタンだったのです。彼らがそんな所に行っているという事が口コミでどんどん明らかになり、あちこちでそういう人たちが出て来ました。

その情報が明治政府の耳に入った時、一番怒ったのが木戸孝允です。彼は本格的にキリシタンを潰そう、弾圧しようと、全国のキリシタンの代表者たち約3,300人を集め、その人たちを全国に流刑にし、その

先で拷問して 660 人以上が殉教しました。水責め・火責め・氷責め・雪責め・箱詰め。目の前で子供たちを殺される親の苦しみ…。これは、明治に入ってから起こっているんですよ。

明治時代のこの弾圧は、江戸時代のどんな弾圧よりも徹底していたと言われてます。

この時の記録を基に、遠藤周作は『最後の殉教者』という小説を書きました。生々しいですよ、これ…。明治に入った時の方が、江戸時代よりももっと凄まじい弾圧が来たのです。

なぜそんなにやったのかというと、明治政府の要職の人たちは幕末の志士。幕末の志士を突き動かしていたイデオロギーは「尊王攘夷」(そののうじょうい)。攘夷の夷は「えびす」と読む事ができ、これは外国人を軽蔑して言う言い方。攘夷の攘は「追い払う」という意味。すなわち「攘夷」は「外国人を追い払う」。

徳川時代・徳川将軍の正式名称は征夷大將軍(せいゐ たいしょうぐん)。つまり、外国人を成敗する将軍が徳川将軍・征夷大將軍。なのに、黒船が来て圧力を受けた時に、力で押されて開国した。

「全然、攘夷してないじゃないか」という事で、これをきっかけにガタガタと崩れて行きました。

「追い払うべき夷(えびす)から来た信仰は、追っ払わなければならない!」これが、幕末の志士たちの論理です。

尊王の「王」とは、もちろん天皇陛下の事。「尊王」とは尊敬するという意味ではなく、「崇拝する」という事で、これを国家神道と言います。「天皇を神々の子孫として重んじ拝む」という国家神道を、明治日本の精神的支柱に据える。これが明治政府の方針なので、キリシタンを許す訳にはいかない。

それで、特に木戸を中心にして大変な弾圧があったのです。

ところが、木戸が2年間外国に行っている間に、西郷は「もう、ええやん」とキリシタン禁教令撤廃に踏み切るんです。なぜそんな荒業ができたのか?

1 つには勝海舟(かつ かいしゅう/1823-1899/文政 6-明治 32)の後押しがあったから。勝という人は聖書をよく読んでいました。「この掟を厳格に適用していたら、何万人もの無辜(むこ)の国民を死なす事になる。しかも、外国から日本は野蛮な国だと思われて、不平等条約の改正がますます遠のいてしまう。ここは一つ、耶蘇教(やそきょう)については黙許(もっきょ)せよ」。黙許。つまり「これから解禁!」と言わなくてもいい。黙って許す。要するに、見て見ぬ振りしようという事。さすが、『腹芸(はらげい)の勝』

「あそこで集まっている。」「ええやん。見えへん、見えへん。」「見えてます。」「見えへんの!」という事で、「穏便にやり過ぎたらいいじゃないか。」「そうですね。」

それで西郷さんは、全国にあったキリシタン取り締まりの高札を一斉に撤去してしまいました。

明治 6 年(1873)の 1 月にキリスト教禁令撤廃をするのですが、なぜ彼は踏み切る事ができたのか?

それは、「この時点までに西郷自身が聖書をよく読み、大きな感化を受け、恐らくはキリストを信じていたのではないか」という研究者の論文が最近出て来ているのです。

西郷隆盛には、有馬藤太(ありま とうた/1837-1924/天保 8-大正 13)という弟子がいました。

彼は既に『西郷どん』に出ましたよ。「有馬!」って言われてたから。5 秒くらい出てました。

薩摩出身の人は警察官が多い。上から目線の警察官は「おい!」って言うでしょ。あの「おい」は薩摩弁で自分の事。「俺が呼んでる」という意味です。

彼は京都で警察の仕事に就いていましたが、その時、神戸で耶蘇教の日本人教師が捕まった。プロテスタントのキリスト教の教師がいた! 日本人や! 禁令破ってる! そこで「有馬よ。ちょっと取り調べに行つて来い」と明治政府に命じられて神戸に出張します。

「取り調べといっても、聖書読んだ事ないし、何聞いていいか分からんし、困ったなあ」と思っていた時に「ああ、そういえば!」と思い出した。

明治の初め、西郷さんがまだ薩摩にいた頃、有馬は彼の家を訪問しました。「有馬。これからは日本も外国と付き合う事になる。外国人の考え方を理解しないと、まともな付き合いはできない。外国人は1に天帝、2に天帝だ。」天帝とは神の事・聖書が言っている天の神の事です。「彼らは聖書からの発想で生きているから、耶蘇教の經典を読んでいないとまともな対話ができない。ここに漢文で書かれた耶蘇教の經典が2冊あるから、おまえも読め。」

でも、彼は読みたくない。「そんな小難しいものは私には無理です。」「コンドウ シンザエモンだったら読めるから読んでもらえ。とにかく読め」。一応受け取るけど、読まないで積読(つんどく)。これが、日本の聖書積読歴史の最初じゃないかと。皆さんの家にも聖書が1冊くらいあるんじゃない? 読まないでしょ? つんどく。40日ほど経って「結構なものでございました」って返した。

「あの時、西郷さんに言われた通り読んでいたら、予備知識になって、耶蘇の教師を取り調べる時に色々聞けたものを。あの時、読んどいたら良かったなあ。」これは『私の明治維新』という本に書いてあって、記録文書として残っています。つまり、西郷は自分の聖書を持っていたんです。漢文で書かれた2冊の經典とは、旧約聖書と新約聖書。西郷隆盛は旧約も新約も持っていた。読んでいた。それだけでなく、弟子たちに読ませようとしていたという事が、これによって分かるのです。

明治に入って、西郷が多くの人々から「あなたの座右の銘を書いて下さい」と言われた時、好んで達筆で書いた四字熟語、それが有名な『敬天愛人』(けいてん あいじん)。因みに今、私は左から右に書きましたが、西郷は右から左に書いています。『人愛天敬』。私はそれをやると、どことなく気持ち悪いので現代式で書きました。

彼は『敬天愛人』と書いた時、必ず『南州書』(なんしゅうしょ)とサインしました。「南州」は西郷隆盛の事。「書」とは、西郷隆盛がオリジナルで書いたのではなく、どこかからの引用文であるという意味。西郷さんは漢詩を書いても優秀で、オリジナルの七言絶句(しちごんぜっく)の漢詩を書く時は「南州」とサインしました。しかし、既にどこかの文献に載っているものを引用して書く時には「南州書」。

「書」というのは引用して書き写したもので、他に既に出典があるという意味。すなわち『敬天愛人』は、どこかの本に書いてあったという事です。西郷さんが熟読していた儒教の本をひも解いたらこの言葉が出てくるか? どこにも出てきません。西郷さんが傾倒していたと言われる陽明学の本のどのページを探っても、敬天愛人という言葉は出て来ません。

しかし、彼が恐らく読んだであろう本の中で、敬天愛人が出て来る本が1冊ある。それは『西国立志篇』。「西国」は西の国ヨーロッパの事。「立志」は志を立てる。「篇」はこれで編集したという意味。これは英語で書かれた本で、翻訳したのは中村正直(なかむら まさなお/1832-1891/天保3-明治24)という昌平覺(しょうへいこう)の天才です。彼は明治維新の2年前に、旗本の息子たちを引き連れてイギリスに留学したのですが、留学中に幕府がなくなってしまう、急に帰国しなければならなくなりました。

船に乗り込む寸前に、「今、イギリスでベストセラーになっている本はこれだよ。訳してみたら?」と渡され、一心不乱に読み続けた本の原題が『セルフヘルプ/自助論』。「じじょ」って、2番目の女の子という意味じゃないですよ。自分を助ける自助。

この本を書いたのはサミュエル・スマイルズ（1812-1904）。牧師。つまり聖書の発想で書かれているのです。その本の内容を簡単に言います。

「誰かが何かしてくれるのを、ただ待っている人の人生には何にも起こらない。誰かが助けてくれるんじゃないかと人任せ・世間任せにして、自らは何もしようとしない人の人生には何も起こらない。神様は人間に、自分を助ける力を与えている。なのに、その力を使い切る事もなく、誰かが何とかしてくれるんじゃないかという事で、社会の制度や世間に期待し、自らは動こうとしない人の人生には、変化も実りもない。」

「今どんなに惨めで貧しくて、厳しい生い立ちであったとしても、神は私に、自分を助ける力を授けて下さっているという事を信じて、ベストを尽くしていくならば、与えられている力を使い切った時に、神は奇跡的な出会い・助け・救い・そして人生の結末を与えてくれる。だから、神の力を経験したいなら、まず人を当てにするのではなく、自分自身を自立させて、やれるところまでやってごらん下さい。」

この本のあとがきを中村正直が書きました。「この考え方を四字熟語で言うと『敬天愛人』である。神は私を無駄に造ったのではなく、使命を与え、他の人を良くし、愛するために造って下さった。原点は天にある。敬天愛人の考え方を持っている人が多い国は強くなり、少ない国は弱くなるであろう。」

『西国立志篇』は、明治時代 100 万部を超えたわずか 2 冊のベストセラーの内の 1 冊です。もう 1 冊は『学問のすゝめ』（* 福沢諭吉著）。そして、西郷と中村は友達。無類の読書家であった西郷がこれを読まないという可能性は低いと思うし、翻訳者と友人だし、何よりも引用文が敬天愛人。

これが書かれている本で、西郷の手に入るのは西国立志篇しかありません。

この本は、聖書の価値観について解き明かす本でした。

「いや、聖書とは関係ない。それは陽明学だ」と解説する方もいます。陽明学の「天」には 3 つ意味があり、1 番目は宇宙、2 番目は宇宙の法則、3 番目は運命。

中村正直が紹介した敬天愛人の「天」は、もちろん聖書に登場する天で、天の父なる神の事。

中村正直は、明治 7 年（1874 年）にクリスチャンになって洗礼を受け、なんと明治天皇にも洗礼を受ける事を勧めました。

これは、イエス・キリストが語った言葉です。

ルカ 6:36 あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。

天の父というのは、宇宙とか法則とか運命ではありません。天の父とは、天をお造りになった神・人間をお造りになった神の事です。人間が作った神じゃない。人間を造った神。

一字違いで大違い！ お天気姉さんと言えば天気予報のキャスターですが、お天気屋の姉さんと言ったらわがままな女。「屋」が付くかどうかで全然違う。一字違いで大違い！

人が作った神々は人を救う事はできません。人をお造りになった作者・天・天の父なる神の人格は「**憐み深い**」。ルカ 6:36 **あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。**

「あなた方の模範は天です。天を見上げ、天を相手にしなさい。天があなた方が見習うべき方。天の父が**憐み深いように、あなた方も天の父のように憐み深くしなさい。**」

憐み深い愛というのは、愛する価値がない者をも愛するという事。

「いや、そんな事言われても、世の中には無礼な奴がおる。しつこい奴・赦し難い奴・あんな奴らを愛さないダメなんですか？」と文句が出るのを想定して、

ルカ 6:37 さばいてはいけません。そうすれば、自分もさばかれません。人を罪に定めてはいけません。

そうすれば、自分も罪に定められません。赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます。

「言いたい事は分かるが裁いてはいけません。裁かれないためです。」

「アイツ失礼や」とか「あの人は罪深い」とか、人の事はもういいと。「人を相手にしないで、天を相手にして、天を見上げて、天に倣っていきなさい。」

ルカ 6:38 与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人人は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。

人人という言葉は、現代訳の聖書には入っていますが、ギリシャ語の原文にはありません。分かり易くするために、翻訳者が聖書の中になかった言葉を勝手に放り込んだ。いかんね、これは…。

憐み深くしたら、憐み深くされます。 憐み深くしたからといって、人は必ずしも憐み深くしてくれませんよ。これは、人々ではなく、神がして下さるという事です。

だから、**マタイ 22:39** 「あなたの隣人（となりびと）をあなた自身のように愛しなさい」なんです。

私たちは美しい人・賢い人・礼儀正しい人は大好き。美しくない人・卑怯な人・無礼な人は嫌い。でも、卑怯な事する・嘘をつく・失礼な事をいっぱいしているのに、それでも無条件に、世の中でたった一人愛している人がいるでしょう？ それは自分。嘘ついたことない人？「ハイ！」それが嘘や。自分は失礼な事するし、失言するし、嘘もつくし、卑怯な事いっぱいやってきたけど、それでも自分の事、愛してるんじゃない？

そのように、ひどい行動をとる自分自身を愛しているように、自分が自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい。あなたの隣人を愛する（愛人）前に、心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主をあがめなさい。愛しなさい。（敬天）。

マタイ 22:39 「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」これが圧縮されたのが「敬天愛人」。

さて、西郷隆盛の思想を紹介する時に、しばしば引用される本が『南州翁遺訓』（なんしゅうおう いくん）。明治3年頃に、庄内藩の藩主たちがわざわざ鹿児島まで行って、西郷から受けた教えをまとめたもの。「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にし、己を尽くし、人を咎めず、我がまことの足らざるを尋ぬべし。天は人も我も同一に愛したもう故、我が愛する心を以って人を愛するなり。」どこかで聞いた事ない？ さっき言いました。「えっ、言いはったん？」言いました。

「天を模範にしなさい。天の父が憐み深いように、あなた方も憐れみ深くしなさい。人を見上げるのではなく、父を見上げなさい。あなた方の模範は天です。人じゃない。自分自身を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい。」

西郷隆盛は、このイエス・キリストの言葉を、自分の言葉として紹介している。つまり、イエスの言葉が彼の中でストーンと落ちて消化され、彼の細胞になっている。だから、自分の言葉に置き換えてそれを語る事ができる。すなわち、聖書を持っていてチラチラ見てたというようなレベルじゃない。聖書とがっぷり組んで・取り組んで・飲み込んで・血肉となり・熟読吟味し・自分のものとなっているので、自分の言葉・表現で言い表す事ができたのです。

11年前の2007年に鹿児島の顕彰館（けいしょうかん）という西郷隆盛の記念館で、『敬天愛人と聖書展』という展示会がありました。その時、福岡在住の方が、当時の館長であった高柳さんに「私の先祖は小倉藩の藩主で、日記を書きおいて、先祖代々伝わっていました。その日記に、『西郷は横浜の教会に行き、

宣教師からキリスト教の洗礼を受け、お礼に豚2頭を送った』と書いてあったと聞いています。」
送られた方も困ったと思いますよ。ロースの状態で貰ったらいいけど、生きてる豚2頭を貰っても、誰が世話する？

問題なのは、この日記は戦争で焼けて無いんです。なので、信憑性を確認するための文書はありません。

もう1つ。この横浜の教会が横浜海岸教会である事は分かっています。そこで洗礼を受けた人たちは洗礼名簿に名前が載るので、ある人がそこへ捜しに行きました。ところが、関東大震災で燃えて、無いんですって。震災以降のはある。関東大震災以前の人たちの、西郷隆盛が載っている名簿は無い。

ここからは、皆様の判断に委ねます。「洗礼を受けた!」と言い切る事はできません。というのは、口伝伝承とか伝聞だから。ちゃんと証拠の記録文書が残ってないので、裏付けが取れない。

だから言い切る事はできないのですが、その後の西郷隆盛の行動原理や様々な事を考えていくと、彼がそうしたという可能性がない訳ではない、という事です。

さて、最後です。外遊組が帰国した明治6年(1873年)に、留守組と外遊組の間で、ものすごい衝突事件が起こります。それは征韓論。私が高校生の時の歴史の教科書には「西郷隆盛は、武力で鎖国李氏朝鮮を脅して開国させようとしたが、それを反対されたので野に下った」と書いてある。「ウソ言うなよ!」
今、中学・高校の教科書で、そう説明している教科書はありません。新しい資料が出て来たから。歴史って、新しい資料でひっくり返る。

例えば聖徳太子。1万円の肖像画の、何か靴べらみたいなのを持っている人。分からない人は若い方です。あの靴べら持っている髭じいさんは、聖徳太子じゃありません。というのは、あの靴べらは笏(しゃく)というのですが、奈良時代に入って初めて採用されるのです。奈良時代以前の、聖徳太子の時代には存在していない物。だから、あれを見て聖徳太子だと思い込んでいる人は旧世代の人たちです。

征韓論についても言える訳で、征韓論を初めて言ったのは西郷ではないのです。

江戸時代の日本の代表窓口は徳川家でした。しかし、明治維新で幕府・徳川家はもうありません。それで、明治元年になった時に、役人を遣わして李氏朝鮮の代表に会いに行きました。「明治政府になったので、これからは、近隣諸国と対等に外交関係を結んでいきたいと思っておりますのでよろしく。」
しかし門前払い。「この西洋かぶれが!」と。

「これからよろしく!」と引越しそば持って行ったら、「いらんわ!」と丼ごとひっくり返された感じ。板垣や大久保が「なんだ! その失礼な態度は!」と激高するのですが、それを止めたのが西郷です。その内に外遊組が出発し、その間に日本と朝鮮の関係はどんどん悪くなって、日本人が殺されたりした。このままではいけないし、鎖国状態が続いていたら、もうすぐそこ、ウラジオストクまでロシアが南下しているわけ。これは大変な事で、島津斉彬は前々から「清国と朝鮮と日本が、アジア3カ国連合で一つにならない限り、欧米列強を押し返す事はできない。」と言っていた。
西郷隆盛は斉彬の教えをよく覚えていたので、緊張した関係になった時に、「なんで門前払い食らったか分かるか? こちらが失礼だからだ。」

李氏朝鮮はどんな国か? 儒教です。儒教で一番重んじる事は体面。メンツ。かたち。
徳川時代、将軍が変わる度に、李氏朝鮮から使者が11回日本に来ました。「おめでとございます」と。その時の随行員だけで最低600人ですよ。威儀を正して。それが、ペーパーの役人1人遣わして、書状持って「これからよろしく!」「あほかー!」という事ですよ。

ここは一つ、明治政府の第一人者と言われている西郷隆盛が朝鮮に渡って交渉したい。
「鎖国をおやめになるように。いや、まずその前に国交を結びませんか？ 対等の立場で」と。
「その時には洋装ではダメだ。烏帽子帷子（えぼしかたびら）という昔の古式ゆかしき日本の服装で行こう。そうやって話せば、きっといける」と西郷は踏んだのです。

なぜかという西郷はこれが得意。薩摩とイギリスが戦争した薩英戦争（1863. 08. 15-17）。
薩摩はボロ負けして、イギリスからの賠償請求の交渉が始まるのですが、その時の薩摩藩の代表が西郷隆盛。イギリスの代表は、西郷と話しているうちに彼に惚れ込んでしまっ「賠償金は要らない。」「賠償はどうするんですか?」「徳川に言う。」徳川、可哀想に。「これからは、イギリスは薩摩の味方になる。」

江戸城無血開城の時もそうでしょ。こじれにこじれ切った関係の懐に飛び込んで一発大逆転！
それは、西郷が一番得意としている業。だから「こじれにこじれている日朝関係は俺に行かせてくれ！
軍隊なんか、連れて行ったらあかんのや。留守組が一致して行って来よう。」

その時、帰国組が帰って来て「何考えてるんだっ?! あんたが行ったら殺されてしまう。そうしたら戦争になる」と言うのですが、これは建前。この2年間、西郷隆盛は10個の改革をやったので、彼への国民の人気は否が応にも高まっています。そして海外組は影が薄くなっていった。
その上、西郷が行って上手くまとめたら、政権内の主導権は絶対に自分たちに戻って来ない。

そこで、行くなという事を決めるために、岩倉具視は必殺技を使います。明治天皇。「政府の中では行く
と決まったかも分からないが、陛下が行くなとおっしゃっている。」彼が天皇に「西郷が行ったら彼は死
にます」と耳打ちしたので、そういう結論になったのです。天皇を政治利用した最初の人岩倉具視。

それで西郷は「ああ、そうか」と明治政府に見切りをつけて、薩摩に帰ってしまいます。
「西郷どんが薩摩に帰られた」という事が知れ渡るや否や、明治政府から600人の役人たちが即時、辞
表を叩きつけて一緒に薩摩に帰りました。西郷が「おいは帰る」と言った時、ずわーっと皆帰った。

それだけでなく、明治政府に不満を持っている不平士族たちが西郷の元に集まって、その数13,000人。
若い士族たちは今にも爆発しそう。それで、彼らのエネルギーが暴発しないように、私学校（しがっこう）
という学校を造りました。鹿児島の大い・山を開拓して畑を作り、西郷も一緒に肥えタンク担いで農作業
をする。やがてロシアと戦争する事になるから、その時のために訓練もする。文武両道、農作業もやる屯
田兵の学校です。それをやりながら、西郷を慕う人たちがどんどん増えていきました。

こうして、エネルギーが暴発しないように押さえていたのですが、これ、東京から見たらどう見えますか？
カリスマ西郷の下に、血気盛んな若者が13,000人集まって。鹿児島は、西郷独立王国に見えませんか？
このまま放っていたら日本はエライ事になる。それで、大久保利通の弟子で、今で言う警視總監の川路
利良（かわじ としよし/1834-1879/天保5-明治12）が、24人の警察官をスパイとして薩摩に送り、彼らの中
に入って仲間割れするように工作を命じました。

でも薩摩の人でないと、薩摩弁を解読する事ができません。すぐにスパイだと見破った私学校の生徒た
ちが彼らを調べていたら、懐から電報が出て来た。それには「ボウズヲシサツセヨ」と書いてある。
ボウズは西郷の事。シサツというのは見て察する「視察」だったのですが、元々明治政府に対して反感を
持っていた彼らは刺し殺すの「刺殺」と読んだ。「我らの西郷さんを殺すために、暗殺するために来たの
か!」。スパイたちを恐るべき拷問にかけて、無理やり「暗殺のために来た」という自白調書を取りました。

それと同時に、鹿児島にはたくさんの武器弾薬庫があったけど、こんな所に置いといたら危ないというので、大久保が汽船を出して大阪に運ぼうとしていた。それが分かった時、「俺たちの事をそんな風に見ているのか！ それだったら、こっちの方が先に取ったるわ！」と酒の勢いに任せて、武器弾薬庫から強奪してしまったのです。

その時、西郷はどこに行っていたかというのと、温泉に浸かっていたんですよ。1か月も。それを責めないでやって欲しい。だって、睾丸が赤ちゃんの頭よりもでかいのよ。はさまって「気をつけ」もできない。痛い！ 多分…。温泉治療以外にないんです。それで1か月、温泉に入っていた。使者が飛んで行って、「こんな事になっている」と現状を伝えた時、西郷は「しもたあ…！ おはんら、何ちゅう事をしでかしてくれたんや！」

武器庫に手をかけるというのは、弁解の余地のない国家反逆罪です。「何ちゅう事した一つ！」彼は、請われるままに皆の所に行くのですが、その間ずっと、熟慮に熟慮を重ねて最終的に決断します。「おはんらに渡した命、おいの体を、おはんらに渡しもうそう。」(私の命・体を、あなたたちにあげます。)この瞬間に、「反逆軍のボスは西郷である」という図式がビシッとハマるんですね。

これが決定した時、西郷は明治政府に手紙を書きます。それを現代訳で簡単に言うならばこうです。「休みをもらって帰省しておりましたが、最近の政府を見た時、ちょっとお聞きしたい事があるので上京する事に致しました。大勢で行きますが、国民がびびらないように気をつけて下さい。」

当時、明治政府に何があったかというのと、ものすごい汚職。特に長州閥。山形有朋（やまがた ありとも/1838-1922/天保 9-大正 11）の巨大賄賂。井上馨（いのうえ かおる/1836-1915/天保 7-大正 4）に至っては、民間人の銅山を横領した。なのに、政府の要人なので逮捕もされず捜査もされず、うやむやの内に誰も罰する事ができない。国の中では、特権を失った士族たちが鬱屈していました。

その手紙を出して、鹿児島から軍隊を連れて東京に向かって北上していく薩摩西郷軍と、それを阻止するために南下する明治政府軍が衝突した戦争が西南戦争（1877/明治 10/1/29-9/24）です。

この西南戦争というのは非常に不思議。西郷は「命を与える」と言うものの、一切指揮を執らない。軍略の天才なのにも拘らず、一切指揮も執らないし、作戦も授けない。ただ部下たちが言う通りに動くのですが、この部下たちの作戦が最低最悪！ 熊本城に突っ込んで行くんです。何で熊本に行くの？ 東京に行かな、東京に。熊本城には武器も弾薬も食料もないんですよ。加藤清正（かとう きよまさ）が造った守りの城。何でそんな所に突っ込んで行く？ 部下が言ったから。

果敢に戦って、最終的に西郷軍の死者 6,400 人。明治政府軍の死者 6,800 人。西郷は撃たれて「もう、こころでよか」と言って。彼は切腹していません。首を落とされて亡くなりました。

その時、勝海舟が歌を詠みました。「ぬれぎぬを干そうともせず 子供らがなすがまにまに果てし君かな」

濡れ衣を干そうともせず；西郷隆盛は明治政府に逆らったり、武器弾薬を取れという指示は一切していない。自分が苦勞して造った明治日本を潰そうなんて事は全然ない。濡れ衣を晴らそうとするのは簡単でしょう。暴走した若者たちを縛って、明治政府に突き出したらい。俺の知らんところで、こいつらが勝手にやったんだ。犯人はこいつらだ！」と言って突き出したら、彼の潔白は証明される。ところが、濡れ衣を干そうとしない。

子供らがなすがまにまに；若い士族の私学校の生徒たちが為す事は全部愚かな事。それについて行ったら、西郷も愚か者になってしまうじゃないか。潔白を証明しようと思ったらできるのに、それをせず、愚か者になってしまうのに、その道に進んで行った。

果てし君かな；最後死んでしまった。どんな者として？ 賊軍として。非常に不名誉な死に方をした。

勝海舟は西郷の事を一番よく分かっている。彼はこれを詠む事によって、この歌に触れた人に「おかしいよね?!」と気づかせようとしたのです。潔白を証明する事ができるのにそれをせず、愚か者の後について行って戦った。つまり、勝つつもりのない戦争をやって、死んでしまったのはなぜなんだろう？

「あの賢い先見性のある西郷隆盛が、なぜそんな死に方をしたのか？」という事を考えさせるのです。

恐らく2つの理由があったと思います。

① 士族の反乱を終わりにするため。それまでも士族の反乱はたくさんありました。しかし、「たとえ西郷が出て来ても、今の明治政府軍には勝てないのだ」という事を立証させたのです。勝ったらダメなんですよ。「あの西郷が出て来ても、政府軍には勝てないのだ」という事を、日本全国に自分の死を以って知らしめた。これ以降、日本に内乱は起こっていません。

② 明治政府を潰すつもりはない。腐敗しきった明治政府を、死を以って諫めるため。

司馬遼太郎（しば りょうたろう）さんが書いているのですが、西南戦争の後、明治政府の汚職がピタッと止まって20年続きます。山形も井上も反省した。

愚かな士族の息子たちと運命を共にしながら、同時に「自分が建てた明治政府に貢献できる道は、自分が死ぬ事しかない」という事で、「おはんらに命を渡す」と言って亡くなったのです。

西郷が愛読していた聖書で、1番中心の人物はイエス・キリストです。

イエスは全てのものをお造りになった神の御子で、人としてこの世界に来て下さいました。

何のために？ 死ぬために。

命と交換する事なしには、生み出す事ができない良いものがある。

死ぬ事がない限り、達成できない偉大な遺産というものがある。

罪のない者が命を捨てない限り、解決できない問題がある。

何でしょう？ 罪人の罪が、聖なる神様の前に赦されるという事です。

キリストは死ぬためにこの世に来られた。キリストは十字架にかかって、全人類の全ての罪を背負って身代わりになり、濡れ衣を晴らそうともせず死んで下さった。

「それは、私たちの罪を償うため、自分のいのちを以って償うためであった」と聖書は語っているのです。

西郷が愛読したであろう聖書の主人公はイエス・キリスト。

その中心主題は「私たちのために十字架にかかって死に、墓に葬られ、3日目に復活したこのイエス・キリストこそが、私たちの人生を一変し、歴史を変える救い主である」という事です。

幕末の志士たちは皆、真剣勝負で生きていました。だから、生き残りの人たちの中に、イエス・キリストの話に触れて、クリスチャンになった人たちが多い。

その中の勝海舟と坂本龍馬の一族の事を、今度お話ししたいと思います。

その前に、彼らの心をそんなにも揺さぶった聖書を積んどくではなく、読んどく。読んでも分からない。解説が必要ですね。分かり易い解説をするために、また次回お会いしたいと思います。是非、皆様が聖書を通して、生ける創造主イエス・キリストに出会って下さいますように。最後まで、ご清聴ありがとうございました。



Figure 1
西郷隆盛



Figure 2
島津斉彬



Figure 3
大久保利通



Figure 4
木戸孝允



Figure 5
伊藤博文



Figure 6
岩倉具視



Figure 7
徳川慶喜



Figure 8
徳川秀忠



Figure 9
勝海舟



Figure10
中村正直



Figure11
川路利良



Figure 12
山縣有朋



Figure 13
井上馨

Figure1-13 : Wikipedia

どうぞ、イエス様を信じて下さい。心からお勧めしたいと思います。

* 動画は YouTube で「[HCA 東住吉キリスト集会](#)」検索。ぜひ見て下さい。

* ラジオ番組「[聖書と福音](#)」(15分) も是非どうぞ。スマホでいつでも聞けます。

動画筆記 : Rumi